

庭をどこから眺めるのか

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. 書院造庭園

わずかに例外はあるが、一般に和風庭園・日本庭園と呼ばれる庭の多くは書院造庭園に分類される。つまり書院から眺めることを重視した庭であり、座観式庭園と呼ぶこともある。大名庭園に代表される広大な庭は回遊式庭園に分類されるが、中心的な建物から眺める庭の景観には配慮が行き届いていて、書院造庭園としての性格も併せ持っている。

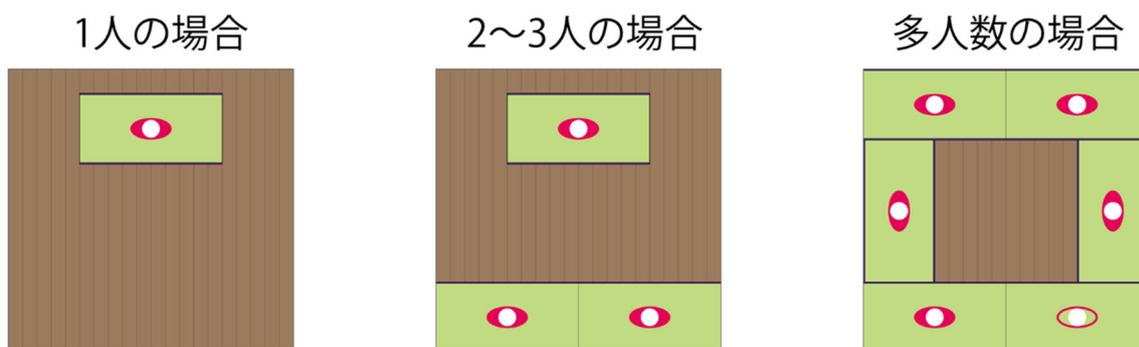
ここで書院と呼んでいるのは武家住宅の客間のことで、武家にとって自分より高位の客人を向かい入れる客間は住宅の中で最も格式が高い部屋である。

もともと書斎という意味しかなかった書院だが、そこに設えていた棚や書見台などが武家住宅の客間を装飾し権威付けするために応用され、床の間・飾り棚・付書院等々という形式に進化していく。中世に成立した武家住宅の様式名が書院造となっているのは、書院が武家住宅の中心的存在だからである。

2. 座敷の語源

一般住宅で武家住宅の書院に該当する部屋は座敷と呼ばれる。座敷の語源は「座を敷き詰めた部屋」で「座」とは畳のことである。貴人は板張りの床に個別の敷物を用いて座り・臥せていたが、その敷物類の総称が「座」で最も高級な「座」が畳である。畳は現在の座布団と同じように一人が一帖を用いる敷物で、身分・位の高さによって大きさ・厚み・縁（へり）の様などが決められていた。百人一首の絵札や戦国武将の肖像画などにも反映されている。

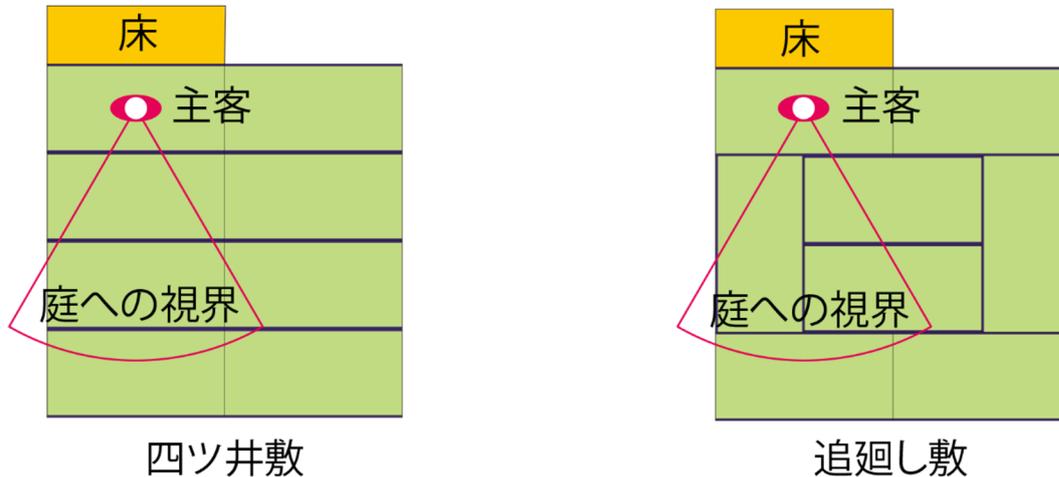
室町から近世にかけて徐々に普及していった畳は権勢を象徴する存在でもあり、最初が一番良い部屋（客人を招き入れる部屋）だけに畳を敷き詰め、座敷と呼ぶようになったと考えられる。



図－1 板敷きの間に畳

3. 畳の敷き方

床の間が設けられている部屋では床の前が上席となる。畳は一人一帖という原則に従って畳を置けば床と平行になるのが自然である。書院造庭園は書院・座敷からの眺めを重視すると述べたが、建物の中で一番良いビューポイントは主客の座る位置・床の前となっている。



図一 2 床の間と主客の位置

床刺し（床の間に対して畳を直角に敷くこと）はタブーとされているが、その理由は縁起が悪いからではなく、畳を敷く本来の目的から逸脱しているからではないだろうか。江戸時代後半あたりから家相・風水などが一般にも広く普及し、現在でも様々なタブーが存在する。庭園からは少し離れるが畳の敷き方について私見を述べたい。

代表的なタブーが不祝儀敷（畳が十文字に接する）という敷き方で、これに対しT字に接する敷き方を祝儀敷と呼んでいる。タブーとされる理由は葬式の時に用いる敷き方で不吉ということだが、全く納得がいかない。近代以前の建物は大半がこの敷き方をしており（二条城、浮世絵など実例多数）、現在でも大広間・宴会場などでは一般的な敷き方でもある。寺院の多くは不祝儀敷だがこれも以前からの敷き方を踏襲しているだけであり、葬儀を執り行う場所＝不祝儀というのはこじつけに過ぎない。

なお、業界用語としてはシュクギ・フシュクギと発音するようだがその理由は不明である。出雲地方では畳を全て平行にする敷き方を一相敷と呼ぶ。畳を敷く側でなく見る側から生まれた言葉のように感じられ趣き深い。

祝儀敷・不祝儀敷には追廻し敷・四ツ井敷という言い方もあり、後者の方が実際の敷き方をなぞっている呼称なので以下こう呼ぶことにする。

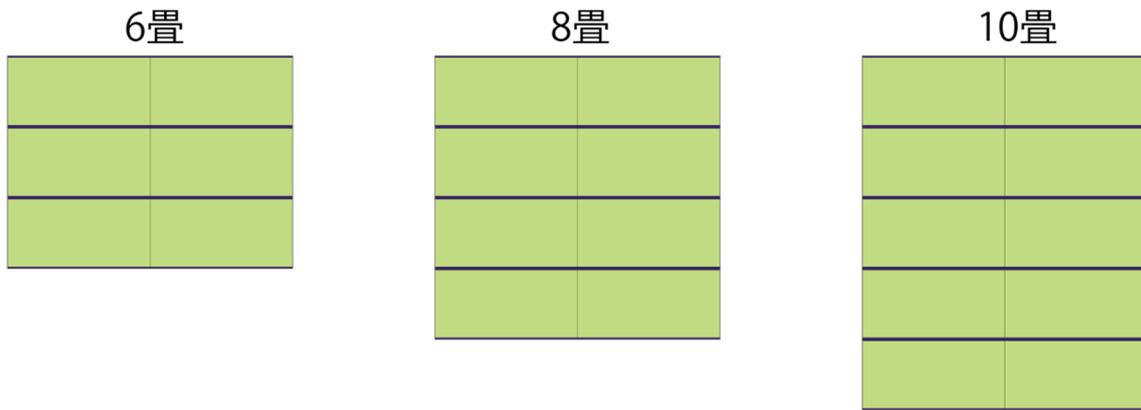


図 - 3 四ツ井敷（一相敷）

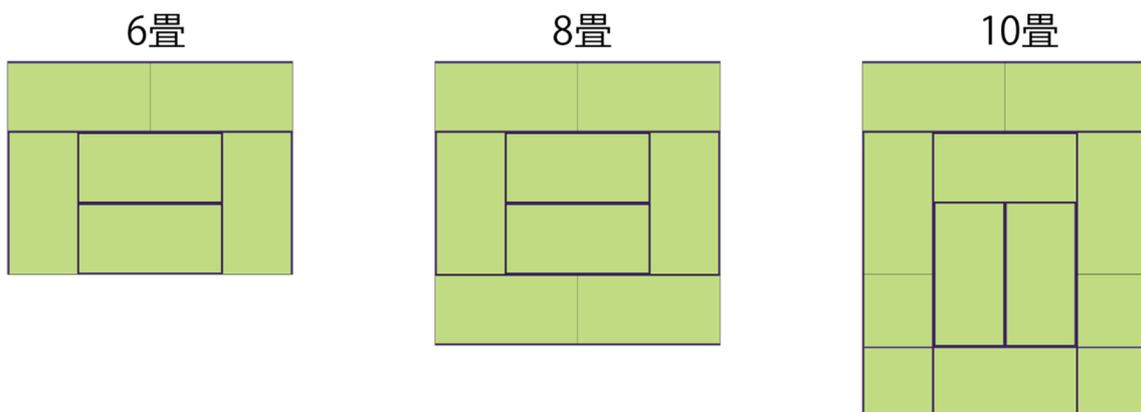


図 - 4 追廻し敷

四ツ井敷（一相敷）のメリットは、

- ・ 着座する位置が明確になる（大人数の時は特に）
- ・ 空間を劇的に演出する効果がある
- ・ 畳の目が一方向に揃うため掃除が容易
- ・ 傷んだ畳との交換が比較的簡単（目立たない場所に移せる）

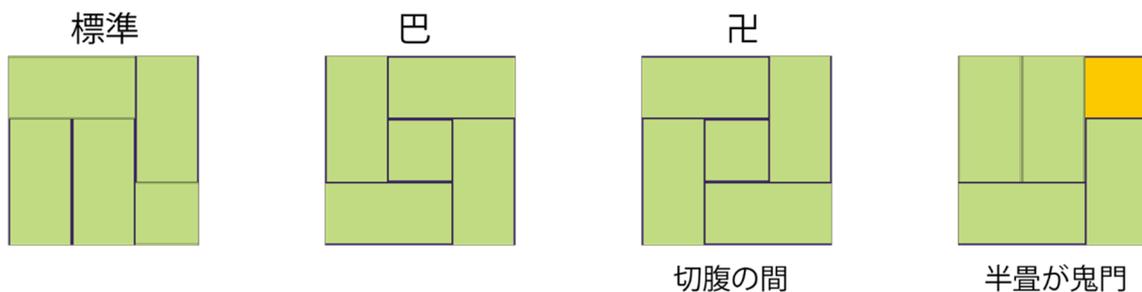
デメリットは

- ・ 4つの角を隙間なく納めるためには非常に高い畳の精度が必要
- ・ 同じ理由で経年による変形・ずれが目立ちやすい

ここから先は想像するしかないが、一般住宅でも畳を敷き詰めるようになると上記デメリットを嫌って追廻し敷が普及し、それでも葬儀の時には古式に従って四ツ井敷とする習慣は最後まで残ったから不祝儀敷という呼び方と俗信が生まれたと思われる。よって、着座位置が明確、空間演出効果が高いなどのメリットを重視する建物では、現在でも四ツ井敷が採用されていると考える。

4. 4 畳半の場合

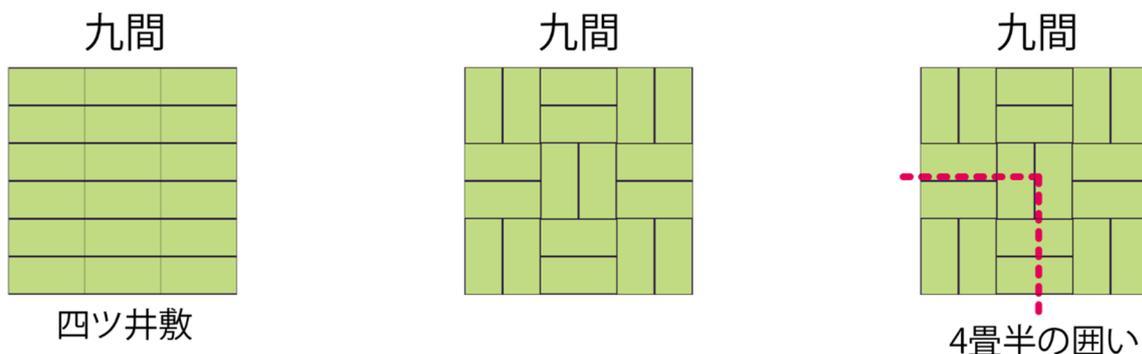
4 畳半については、卍に敷くのは切腹の間の敷き方なので避けるべき、半畳を北東（鬼門）に置かない、などが代表的なタブーである。切腹の間については、そもそもそのような部屋あったとは思えないこと（部屋を用意する方がよっぽど不吉）、実際に切腹を行うには4 畳半では狭すぎる（介錯人が刀を振るえない）、血で汚れた畳の交換が真ん中の半畳で済むわけがないこと（最低でも2 畳分か）など、全くの妄言としか思えない。風水（鬼門）についても基本的には同じ感想をもっているが、信じることは自由であろう。



図－5 4 畳半の敷き方

茶室は小間（4 畳半以下）と広間（4 畳半以上）に分けられるが、4 畳半が基準となった経緯には村田珠光が関わっている。当時、茶会には一定の場所や制式がなかったが、珠光は貴人の邸宅には必ず設けられていた九間（このま）を屏風で囲い、ここで茶礼を行ったとされる。後世、茶室のことを囲いと称するのもこれに由来している。九間は3 間×3 間（18 畳）の部屋で、ここで連歌など様々な催しが行われた。当時、畳は四ツ井敷あるいは2 畳セットで市松様に敷かれたと思われ（敷き方の呼称は不明）、後者を囲って4 畳半にすると、現在、標準的とされる4 畳半の敷き方に近い。

独立した茶室は足利義政が建てた東求堂の小書院（4 畳半）が始まりとされる。東求堂の小書院は現存する最古の書院造建築でもあるが、畳の敷き方は上図の巴に該当する。



図－6 九間と4 畳半の囲い

5. 棹縁天井

畳と同じように天井の棹縁も床刺しが良くないと言われることがあるが、これも縁起が悪いからという理由は後世のこじつけと知っている。

棹縁天井の棹縁は天井板と直行するため、

- ・ 長方形の部屋では長手方向に用いる（短い方を板とする）
- 次いで、
- ・ 床の間飾り（掛け軸など）の位置に干渉しないよう床刺しを避ける
 - ・ 太陽光によって生じる影を避けるため、なるべく庭と直行させる

といった観点からその方向が決められ、隣あう部屋で向きを揃えるか違えるかは空間演出の考え方次第となる。なるべく床刺しは避けたほうが良いのだが絶対的なタブーではなく、様々な条件を総合的に検討して決めるべきものである。安易に縁起云々という批評はすべきではないと考えている。

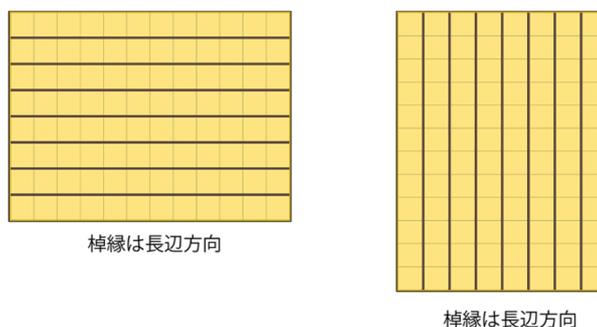


図-7 棹縁の向き

6. 関西と出雲の間取り

関西では仏壇・床の間が座敷の西側にある間取りが多く、庭のある南側からの太陽光を避けて棹縁を南北方向にしても床刺しにならないが、出雲に多い床の間・仏壇が北側に来る間取りでは棹縁は床刺しを避けて東西方向になっていることが多い。仏壇は隣の部屋に置かれることが多いが、やはり棹縁は床刺しを避けて東西方向になっているケースが多い印象である。

次頁の図9に主客の座る位置と庭への視界を示しているが、本来、出雲の住宅では床の間～主客の位置～庭への視界～実際の庭が最も良い関係で構成されていたと思われる。しかし、現在多くの住宅では座敷の中央にテーブルが置かれ庭を眺めるのに最も適した場所には誰も座らない。

生活様式が変わったため致し方ないことではあるが、たまには床の前に座って庭を眺めてもらいたいと感じている。

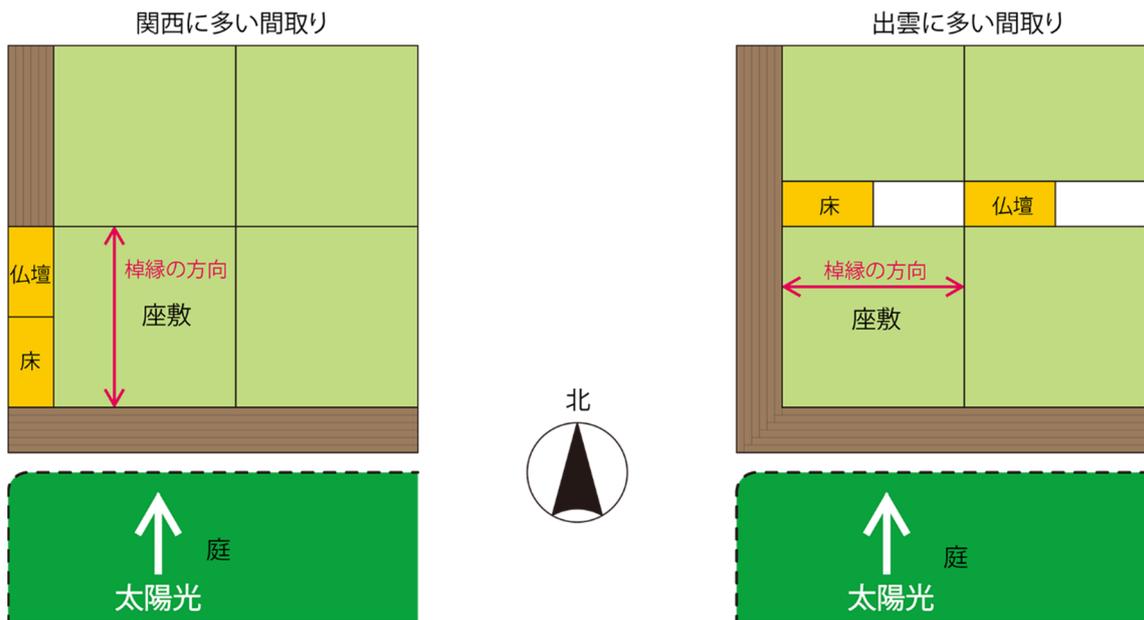


図-8 床の間と棹縁の関係

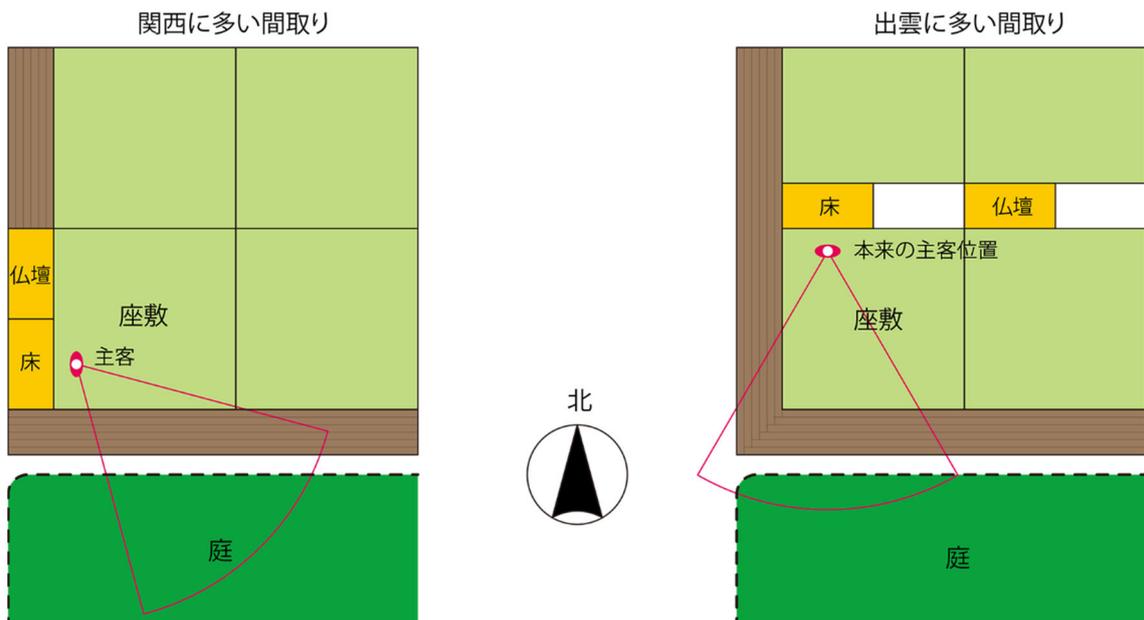


図-9 主客の位置と庭への視界